微睡

madoromi

翠

森の中で出逢ってからのこと。

森の中で君と出会ってからのこと。

彼女に口裏を合わせて
僕は何となく思っている。

「君のいう世界は必ずしもこの世にありながら触れられないところにあるだけだ」

君の笑顔は色鮮やかでこの景色そのものを栄えさせる。

(だから僕は君を手放せない)

君といると、雨が欲しくなる。

潤う君の存在に僕の手を重ねようなんて。

(そんなことをすれば、君は蒸発してしまいそうで触れがたい)

彼女の口がまた僕の思考を浸す。

(本当のことなんて、何の価値があるんだ)

同じ世界にいるんだって囁くと、君は嬉しそうに続きを話す。

(僕はずっと君とここにいたいと願っていた)

揺れる唇が静かに潤う。
触れる寸前、君は微笑った。

君の唇は潤いに満ちている。

(そこに生々しい熱はなかった)

君の涙のような笑顔は
僕の脳内に浸透して僕は君色を得る。

(僕は君になったようだ)

そのまま二人溶け落ちて
狭い丸い水溜まりに沈んで
晴れの日の虹を映す、鏡になろうか。

(僕は君に知る。二人何度でもこうして、巡り会うんだって)

黄金の中に眠る君の影絵

もう風が冷たくなってきた

近頃は木々も鮮やかに橙
僕は密かに部屋を抜け出して
相変わらずあの銀杏の木の下に
来るのが好きなんだ。

昔はよく二人でここに来たね、なんて。

(馬鹿みたいにそれが真剣)

袖が長い服の裾を伸ばしてね、
手を覆う癖、未だに直らない。

君はよく、僕の裾を引っ張った。

あの仕種が愛らしくて好きだった。

昨年を思い出すと
いまの僕らはすっかり別人だね
君の返事が聞こえないのも、
変わった証になる。

(確か先月も、同じことを思ったんだ)

僕は他愛のないことを考えて
毎日を暮らしている。

そして僕には明日も明後日も
他愛のないことで埋め尽くされた日々が
確かに用意されている。

僕はそれを摘むように頂く。

全部食べるほど、美味しくもないものばかり。

あの頃には何も敵わないね、
なんてこっそり泣いてみる。

君のことだから、
困った顔して、錯覚よ、
なんて言うのかもしれない。

(僕はもう、何度君に諭されたことだろう)

君の重みのない身軽な生活

僕はそれをどこかで喜んで、
僕はそれをどこかで悲観している。

見上げた空は青が広がって
そこには何もなかった。

僕のこころにも
同じ風が吹き抜けている。

冷たくて、清々しくて、
全てをなくしたあとの、寂しい 風。

(明日にもきっと同じことを考えてる)

無色、白銀はやがて夢に還る

雪淡く降り下りて木々に宿る。
世界は白銀に満ちている。

雪の上を滑る朝陽。
さくさくと音を立てた名残、雪に象る足跡。

吐く息は空を昇る。
君の笑顔が窓辺に写る。

僕の聖域。

次々に髪色を変える君
僕は会う度に「はじめまして」

変化なんてないのかもしれない。
ただ始まり終わるだけ。

一つの体が始まり、終わるだけ。

夜に溶け落ちた外灯の光
僕の影は伸びて。

「君が好きだった」

悲しい声が月へ昇る。
僕はただ、微笑う。

氷柱、窓辺彩り。
傘を指す僕の眼に君の憂い顔
「はじめまして」
君の頬が染まる。

思わず目を反らす仕草、変わらない。

ただ流転し、君は繰り返す。
僕は流れていくんだ、なんて
君には言えない。

朝が明ける前の白い夜
君の顔は悲しげに。
「僕はもう、行くね」
愛しい眼が朝陽を受ける。
君の声は一枚の窓に阻まれ、苦笑い。

君は眠りに落ちてしまうとしても。
僕は君を忘れない。

夜に溶け落ちた外灯の光
僕の影は伸びて。
「それでも君が好きだった」
悲しい声が月を昇る。
僕は窓辺に希う。

ただ、静寂。

空が鳴く

雨の音。しとしと。
喪服。傘の下の憂鬱。

「あなたがいなくなった日」

信じられない。嘘。
本当は待ってた。理由。

(根本的に私達は合わない)

声、雨音に打たれ沈静。
「寂しい」、今更。

風に吹かれ、身に染みる孤独。

(明日は変わらず来る)

「あなたの代わりに」

生きて、生きて、ただ生きている。

雨、しとしと、視界紛らす
霞、まるで夢心地。

(ここでならあなたに会える？)

泣けない私の代わりに
雲が涙を零した、それだけ

「合わなくても幸せだった」

(そんなこと本当はどうでもよかった)

黒、あなたの死を映す。
ねえ、それでも私は愛することを止めない。

(愛に死は来るの？)

青天、今日も重苦しく。
脱げない、黒。
隠せない、本音。

「元気そうでよかった」

裏腹な生き様。

馬鹿みたいに笑う私

生きているって空しい

それでも今日も笑っている
あなたの代わりに笑っている

無害の牢獄

朝が陰欝に落ちてくる
鳴り止まない鐘の音
一層、眠気が襲う衝動
こういうのを、誘惑っていうんだ。

即席で煎れたコーヒーはまずい
窓辺に付いた霜を掃う

未だ、陽の上がらない朝

ひとりきりで過ごせばなにかが変わるんだ

そういって君を追い払った

神経質の僕はね、
無機質の空間に何かが息づくこと自体、許せない。

つまり僕はこの空間を守るため
沢山を殺している。

窓辺に付いた水滴は虹色に。
冷たい風が流れ込む
僕は空を目指した

「ここにある毒は一つ」

水滴の転移
僕の頬に虹色

思い出が染み付きそうな部屋に
何も馴染まぬよう殺菌

僕でさえ、僕でさえ。

息づいた跡を消臭
触れた全てを拭き取って
僕は空間を保つ為に。
僕は無機を保つ為に。

「ここには何もなかった」

手に消毒の匂い
僕の皮膚は強いから、溶けることは適わない。

僕は空を目指す
「無機物になるために」

伸ばした手を風が強く打ち付ける

開くはずのない扉

するはずのない足音

忘れかけていた顔を映す窓

たくさんが眠る世界で

僕の名を呼ぶ声がする。

毒気混じりの空気

「ここに生命は二つも要らない」

濃度が強くなる度に
僕らは空間を破壊する。

「だったら一つになればいい」

こういうのを、誘惑っていうんだ。

「死ぬよ、僕らは」

無機質の空間に有機物は毒なんだって、
何度口を付いて出た。

水滴の転移
あなたの頬に虹色

これ以上怖いことはない

熱で満ちた二つの体は
無機質の空間に溶け落ちて消える。

すれちがい

幾度となく憂鬱げに沈む。

君とまた喧嘩した。
ごめんね、という言葉が付いて回る。

嫌な夜更け。

今夜、君からの連絡はなし。

気付けばこんなことも当たり前になっていた。
許されると思って声を荒げていた自分がいる。

「私たちは合わない」

そんな言葉が本気だなんて
信じない僕がいる。

何度でもあったこと。
それはつまり、何度でも繰り返してきたこと。

「私たちは合わない」

反論ひとつ浮かばないのに、
「悲しい」なんて、何が本音と言えたんだろう。

霞む「好き」という言葉。
僕は君が好きなんだろうか。
君は僕が好きなんだろうか。

都合の良い「愛」を疑う。

君をまた泣かせた。
ごめんね、という言葉が付いて回る。

(こちらから歩み寄ろうとする意志は)

溜息揺らぎ流され。
いま浮かんだ雑念ごと忘れる。

「僕たちは合わない」

反芻する言葉が痛い、なんて。

きっと君は納得する。
ふたりで悲しげに、目を合わせるんだろう。

「本当は分かってる」

僕らは想い合っていない。

事実が身に染み込むまでの
時間が苦しい、なんて。

僕は弱いんだ。

(だけど事実は変わらない)

白く霧が視界を覆う。
本当は君自身を想ってた。

(だけどそれ以上に、君の一面だけを愛してた)

白く霧が視界を覆う。
前を向いていくしかない。

(だけど何度も頭の中に君の姿を描いてる。)

欲求と本音のあいだで。
僕は君に揺れる。
事実は動くことがないまま。

やがて僕たちは霧を掃う。

朝が来て。

(その時僕らは、誰に向かって微笑みかけているんだろうか)

陽が灯る心層

朝焼けが過ぎて
街に陽が渡る。

ねえ、彼女。

僕の大部分が
何で出来ているか知ってる？

夕闇が過ぎて
街に光が燈る。

ねえ、君は。

共通した記憶をどう受け止めている？

雪が降りそうな寒空の日
いま君を温めるのは。

僕は過去に囚われず
いま君の笑顔を守るものに
挿す花を見繕う。

君の寂しい顔を思い出す度、震える。

守るために生きたいと願い誓った、
君の幸福は僕を満たすから。

陰鬱な空が君の頭上にあるなら、
傘をさすから。
君は不適切と顰ても。

大事と謳う、揺るがず。
花は君の側に。

何を受けても恐れないで、
失わないで、
ねえ、僕の一方的な願いに。

君はなんと言おうと受け止めて。

「あなたが辛いなら嫌だ」

その優しさを、
僕は身に刻むだけでいい。

それだけで、満たされる。

だから、君に飾る花を。
君を纏う幸福に花を。

それは全て愛情に放還する。
それは熱情に由縁する。

ねえ、彼女。

泣かないで下さい。

雨が降る。

この本をもう一度取り上げる頃には
その全てを知っていた。

はじまりからおしまいまで。

それは唐突にはじまり、
おわりを告げた。

混線状態に思えた進路は、
いまになっては一本の
正当な直線であった。

はじまるべくしてはじまり、
体よく完結を結んだ。

いま僕は、この全てを知っている。
それでも、また、開く度に。
感情が浮かび、感化され、
また、涙が溢れてくる。

好きなんだ、僕は。

この一冊ははじまり、
完結を結び、
一冊として形取り。

文字として記録された物語は
形を成してこの本棚の一角に
姿を残し続けるのだ。

それは何冊と積み上げても色褪せない。
一冊、また一冊と増えても、
塗り変わることのない物語。

読む毎に物語は色々な側面を見せる。

いま、何回目の考察だろう。
読む度に深く刻み込まれる感情。

「忘れないで。私はいつまでも、あなたはあなたとして想っているから」

積み上げてきた感動に
過去の符号なんて付けられないよ。

いまの僕は、これなしには有り得なかった。

そんな一冊に、この無駄のない物語を選ぶ。

それは薄くもなく分厚くもなく、
余分のない、シンプルな。

愛しいのに、悲しい物語。

「忘れないで。私はいつまでも、あなたとの記憶を守るから」

何度でもこの本を手に取った。
その度、見知った結末に
心が辛くさえなる。

深さを増す内容に、
読み進める度に苦しくなるのは、
たった一つの結末が、
そのたくさんを含めた結論で。

変わらないのに、願いたい。
彼らの幻想が叶う世界を。

何度読み起こそうと変わらない。

やっぱり君は、愛しいんだ。

ふたつのこたえ

僕を気遣う様子の君
不安は相変わらずのよう。

一度放した心、二度までも。

僕をうたぐる様子の君。
大事に意思を守っている。

懸けて、試した。
それは形か空気か。

「私は忘れる」

思い返すのは嫌いなの、と
君の意思が夜を覆えど。

「僕は忘れない」

何度だって、
大切な心、忘れたりしない。

僕は夜に光を射す。

だから、ねえ、
何度君が僕を忘れても。
僕は君に、と願うけれど、

「それはどこまで真実？」

君の声が刺さる夜。

愛情の構成は情愛にはじまり、
心に染みるまで広がりを見せ、

なおも君を捉えた時、確認する。

愛情の縁は君に還る。
僕はそうであって欲しいと願った。
僕はそうであらなくてはと、
この夜に誓った。

「私は忘れる」

夜に紛れて消えそうな声
僕は繋ぎ止められるだろうか。

儚くて消えそうな君。
僕は愛しい。
今更になって劈くように耳に響くの。

夜に誓う。

君への愛情を失くさず抱くから、

笑って。

白い頁を彩る笑顔

白い足跡を見つめ直す度
この痕跡をどう受け止めるべきか迷う。

過去の扉は開き切ったままで
何度も覗き込む。

「貴方が好き」
その言葉が繰り返される度に
どう受け止めるべきか迷う。

それは過去のみの真実で。

ほら二度目の冬。
同じ想いを抱いて。
夢に終わらせてしまうこと。
二つの影、真理となりにせば。

僕の声は白く舞い上がる。

君の声は残留。

蒸留するの、僕の本音。

(それは過去の残り香)

幻想と現実と
君達は混じり合わない。

錯乱する影は跡を残す。
真白い足跡。
君の形が色濃く残って。

「寒い」
それは僕だけの幻想。

ほら二度目の冬。
同じ想いを抱いて。
現実が動き出す。
二つの影、過去となれば。

僕の涙は跡を残す。

君の涙はもう、僕を忘れて。

信号は点滅する。

空しいと彼女は言った。
しかしその時の僕はそれほど
気にかけていなかった。

空しいなら満たしてやりたい、くらいのものだった。

しかし何を重ねても彼女の目は空しいと言った。
不変の微温湯が肌に合わないような感じだった。

「息苦しい」
という言葉の真意を僕は考えたりしなかった。

彼女はいつしか僕を疎んじ始めた。
「苦しい」と彼女はいつも訴えたが、
何が苦しいのか僕には分からなかった。

空しいは寂しいじゃない。

僕は湯立つ彼女にまだ、熱を浴びせていたのだ。
けれどそれに何も気付かなかった。

何より僕は矛盾を浴びせた。
彼女はただ熱を浴びせられるだけの対象。
そんな風な空しい声を聞いた。

彼女はその時、全てにその都合を認めた。

「私は、都合の良い容物」

彼女は極度のものを抱え込んでいた。
熱すぎるもの、冷たすぎるもの。
両方の狭間で呼吸困難に陥っていた。

しかし、誰もが彼女に気付けなかった。
彼女は二つを投げてしまうことで、
回避することを決めた。

投げられた僕は。
直感的な判断だった。それは意思ではなかった。
触れたら壊れてしまいそうだと恐れた。
「触れるべきではない」
それは驚くほど動物的な意思。

彼女は今度、何も掴めない暗闇を恐れた。
一方で、これが最善と涙を飲んでいた。

僕はその意思を眺めておくことしか出来なくて。
触れたら壊れる。
それは彼女も、僕自身も。
だけど、掴んでいなきゃ、怖かったんだ。
彼女も、僕も。
その不安だけは、内に隠して。

虚無のあとには、なにもない恐怖が。
しかしそれを乗り越えた時、
そうあるべきであった事実に
気付いてしまうのだろうか。

「私は忘れる」
と彼女は言った。

思い返すことは空しい、と。

どうにもならないこと。
それは過去で固まってしまっているから。

しかし現在において。
思い返すことは空しくても、
続きを紡ぐことは出来る。

僕はそう言った。
「君は過去に潔癖だ」

過去は捨てていくものではなくて。
現在の僕らの横に、並んでいるものなのだ。

ある一瞬から続きを探す時、
それは現在において叶うことで。

「それこそ空しい」
と彼女は笑った。

「その時目の前にいるのは、過去の二人じゃない。現在の二人だ」
と僕は言った。

彼女は首を横に振った。
「空しいんじゃない」と。

「それは、寂しいんだわ」

「だけど、そのまま何もなくなってしまうほうが、僕は寂しい」

彼女は僕の肩に頭を預けた。
二人の時間は一度止まるのだと、
僕ははっきり感じていた。

彼女は、その目で、終わりを見つめていたんだろうか。

ただ真実は情のみを残した。

彼女はそれを、信じてくれていただろうか。

また交差する日には、今とは違う二人が並んで。

その時、僕らは、何を掴んでいるのだろう。

空しさの、先に。

逃げない、逃げられない。

何度も目覚める。
起きがけに見る夢すら忘れ、
思い耽ると不安が
寒気と同時に襲い掛かる。

毛布に包まり、横たわる。
目覚めたくないと
駄々をこねる僕の毎朝。

僕は駄目。
何度誓っても、願っても小心。

君一人思い返すだけで。

忘れてしまったならば
もっと恐れてしまう。
見ないふりは僕を救わない。

信じてる、と言葉をいくつ並べても、
小心する。僕は駄目。

本当に信じればきっと、
何も怖いことなんてない。

理性的に考える。
でも、僕は駄目。

失うことばかり考える恐怖。

見捨てないで、
忘れないで、
願うばかりで何も触れない僕は小心者。

本当に信じられたなら。

君そのものを信じられたなら。

信じないのは僕の不安。
何もしないで、大丈夫なんて、
誰だって思えはしないよ。
なのに手付かずの僕は馬鹿。

何かを始めることすら、
恐れてしまうようじゃ
君には届かない。

なのに煩悶する。

意地ばかり強く、
与えられることばかり待っている。
そんなに甘いことは、
期待して待つものじゃないのに。

ただひたすら私を思って苦しむばかりなら、忘れてくださいと、
いつ、言われるかすら不安で。

何も出来ない僕は駄目。
不安しか掴まない僕は馬鹿。

何度も目覚める。
起きがけに見る夢すら忘れ、
思い耽ると不安が
寒気と同時に襲い掛かる。

毛布に包まり、横たわる。
目覚めたくないと
駄々をこねる僕の毎朝。

明けない夜ばかり夢見てる朝。

傘下の憂鬱

生きているのがちょっと憂鬱で、窮屈で、
ぼんやりした雲が空に掛かっていて、
細い雨が降り出して。

わたし、ひとりきりがだいすき。

そんなことをふと思っちゃうんだ。
赤い傘の下で。
笑う誰かの嘘を通りすがりに見抜きながら。

ひとりを楽しめる方が、
生きているのが幾倍も楽しいのに。

わたし、いま、なんだか。なんだか。

木々で囲まれたこの通りには
虚構で包まれた傘下の仲が、
灰色して浮かんでいる。
わたしはそれが、だいきらい。
わたしはそれが、だいきらい。

赤い傘さしてわたし、
赤い唇噛んでわたし、
赤い眼をしてわたし、
嘘に気付きながら通り過ぎる。

丸いひらひらの黒スカートをゆらして。
赤いパンプスで道を跳ねる。
嘘に、飲まれないように。
わたし、ひとりを、誇っているの。

ひとが、ひとにみえなくなってしまえば、
わたしのこんな憂鬱も、窮屈さも、
なくなってしまえるのかな。

わたし、いま、なんだか。なんだか。

影は小さくまとまる。

何が欲しかったのだろう、と
今更になってから呟く。
得てから思う。いつものこと。

こんな宵闇は嫌い。
私を纏う黒髪を嫌って、
ばっさり切り落としてしまった。
疎らさも気にならぬ茶髪へと色を変え。
でもね、どんなに私が変わっても、
変われないよ。
どうしても切り落とせないのは記憶。

忘れてしまえれば良かった。
幸福なことだけでも、忘れたい。

何が欲しかったのだろう。
魅せるためだけに飾った表面で笑えば、
空間は染まる。
私というどこか別物な私が生まれる。

それの手を引く彼らは
私から彼女を引き抜いてしまい、
いつだって心だけ置いて行かれている。

構わない。
私は隠れてしまっても、構わない。

だけどね、身体は一つ。
また重なる記憶が増え。
私の身動きを封じる。

見たくないものまで、
見すぎてしまったんだ。

淡い色の服を切り捨てて、
黒で身を包んでも、隠れない。
塗り潰してしまいたいのは私自身。

いつまでも、どこまでも、
私は変わらない。
だって掴めない。
大切なことだけは、いつだって。

降り続く雪よ。
どうか私まで溶かしてください。
こんな世界に移ろうのは空しい。

積雪を照らす街灯よ。
月よりも明瞭で。
私の目を奪い隠すの、こんな黒い涙まで。

なくなってしまえたなら、
私はもう何も恐れないのに。

ほら、また、演じている彼女は
私の名を借りて独り歩きする。

私の目に映るのは、
この照らされて降り積もる、雪のみ。

寒いのは、誰だ。

何が欲しかったのだろう、と
今更になってから呟く。
得てから思う。いつものこと。

手を離すことは簡単なのに、
いつだって手を切ることは、敵わない。

重ねるしかない記憶。
この雪の下には、

どれほど醜悪な心が眠っているのだろう。

照らすのはいつだって、表面ばかり。

積雪の嘘

真白い雪のような手に取られて
僕はちいさく身を縮める。

寒い、と言う君の唇は
柔らかな薄桃色で、
僕はそれに触れたくなって混迷する。

ねえ、君のその全てに、
僕は未だに敵わない。

君の好きなもの、
通りすがる街中ですかさず視線を追う。
そうして僕は君を覚えようとして
何度も頭に思い描くんだ。

僕の頭で出来上がる君は
いつだって出来損ないで
全く本物の君には及ばない。
それでも手を掴んで、熱を覚えて、
離せない、なんて自分から繋いで、
笑うしかないように、
君を困った顔にさせる。

僕は狡いね。
いつだってそれでもなんて言葉を使う。
君の本当、はいつだって僕には
艶めかしく響くんだ。

熱を保つ僕の手に触れてもまだ、
君は寒い、と言う。
柔らかな薄桃色で、
僕はそれに触れたくなって混迷する。

僕らを芯から温めるものは

愛情なんかではないんだ。

約束に囚われて、縛られてもまた、
笑うしかないように、
君を困った顔にさせる。

僕の頭で出来上がる君は
いつだって出来損ないで
全く本物の君には及ばない。

真白い雪のような手に取られて
僕はちいさく身を縮める。

本当は、本物を知る心を忘れたかった。

嘘のない二人なんて、
どこにも可愛いことなんてない。

いつだってそれでもなんて言葉を使う。
君は相変わらず運命を見透かしたような目で
僕を見上げている。

君の目に映る僕は、本物だろうか。

どうにももう、
この迫る暗い闇は、いつまでも背について回り、
そろそろ、僕らを飲み込んでしまう。

喫茶店の窓際

何を待っているんだろう。
何時まで待っているんだろう。

あなたの言葉は私に届きはしない。
だからこうして動かずにいる。

あなたは私を縛り付けてしまった。
叶えるはずのない約束で。

過ぎる車を一体何台見つめていたことか。
空は雲が覆い、重たげに。
所在のない私と、在るだけのもの。
その対比にはどんな額が似合うのだろう。

何を待っているんだろう。
何時まで待っているんだろう。

散々に知った本当も
小手先上手な造形で。
それを知って何になる。
ただ、私自身を勇気付けるためで。

無意味なものの重用だと
彼らは私を評しても空しい。

私は一体、いくつ人を見つめた。
だけど輪郭を帯びないのは
ただ彼のみを人と認識するために。

私は、何時までも無意味だ。

何を待っているんだろう。
何時まで待っているんだろう。

私は、何処にいるんだろう。

真夏の夜の夢

靡く風が、線香花火の火を落とす。
曇り空が急ぎ足で流れていく。
行くぞ、と手を引く彼がいる。

何のために着飾ったっけ。
夏の夜は暑いから選んだ、涼しげな水色の浴衣が
妙に寒々しい。

祭の熱気は風にさらわれた。

人で進めなかった神社前も、
今じゃ閑散として、走り抜けることも出来る。
履き慣れない下駄が痛い。
彼のスニーカーに、追い付けない。

何のために買ったんだっけ。
雰囲気が欲しくて買ったお面も邪魔だ。
彼の手が痛い。

何だか、夏は寒いんだなと思ったの。
何だか、夏は冷たいんだなと思ったの。
何だか、夏は悲しいんだなと思ったの。

打ち上げた後の花火の残骸が、
燃え尽きた現実が、
私を刺していくの。

寝苦しい暑さも、得られなくって。
露で濡れる手が、滑る。

この手を離してしまいたい。
どうせ濡れるなら、歩いて帰る。
あなたの気持ちすら雲で覆われて見えない。
視界は朧げに、揺れる白い煙りと混じる。

急に消火され、上がる煙りの中に
あなたまで消えていく。

夏は、痛いの。

露で濡れてしまったことにして、
もう離してしまって。
振り返らないあなたの背ばかり見つめるくらいなら。

私は、夏の日をすべて幻だったと目を閉じる。

先にある希望

私は、ここでうずくまっております。
それは強烈な意識がです。

自我は強いくせに、
意志が弱いのです。

だから、降る夜も恐怖が身に染みている。

だけどね、あなたは違うのでしょう。
私は知っています。

幾夜もあなたは私に約束した。
その力がいまになって眩しい。

追い掛けるには遠い、
その背はもう、私を振り返りはしない。

待っててくれる？
そう願っていたけど、もう。

来る朝の憂鬱は、
目を背けた私のみが知るもので。

あなたは強く、風さえ恐れず、
夜にも飲まれず、
あなたの足は意志の強さで立っている。
くじけた私の足は、弱さのせい。

どうしてみても、立ち直る自信もない。

あなたが眩しい、
それがただ悲しいだけ。

照らす月は、私を一層孤独にする。
吹く風は、あなたが向かった先からくる。

分かっているんだ。

愛情の交差

彩り豊かな空色も
滲みはじめた雲で隠れる。

傘は、単色を空に突き付けて。

（泳いでいくには手が遠い）

君のような無機質な瞳には
どんな色味が馴染むのか
私にはそれすら探せない。

（広い地上で声すら響かず）

あなたはどこへ帰るのだろう。
手放したくないものに背を向けてまで目指す帰路

もしもふたりに何の制約もなければ、
私たちは、何処へ向かうんだろう。

きっとそれでも居場所を設け、
また制約の中に生き続けるんだ。

（それがないと、不安になるから）

宛てもないのに繋げない手。
それでも望んでいるんだ、
ふたり背を向けず、歩いていける道を。

彩り豊かな空色も
滲みはじめた雲で隠れる。

ぽたりと落ちて、地に沈む雫を。

私は愛していけるかしら。

どんな歩幅も、
いつか眠るその時まで。

見守っていけるかしら。

絶対などと口にしても、
交わり合わない吐息を
それでも手放さずにいる、強い心。

空から落ちてくる激情に、
飲み込まれて流されない、強い姿勢。

あなたを愛していくことだけで、
私は、堪えられるかしら。

滲む空色

偽れない瞳はあなただけを映している。

満足出来そうもないのに頷いて、
我慢出来そうにないのに首振って、
遠慮がちに笑って見せる仕草を
私はもう何度繰り返してきたのか。

気付いて。
でも気付かなくていい。

虚ろに目を漂わせる仕草を
私はもう何度繰り返しただろう。

心だけは溺れた振りをする。

ねえ、気付いて、でも、やっぱり。

私は苦笑いで精一杯伝えている振りをする。
それを嫌うあなたのことも、分かっているのにね。

好きだから、好きだからなのよ、
だから分かってほしいの。

どんなわがままより、
ずっとずるいこと、分かっているのにね。

私はあなたが好きなのよ。

満足出来そうもないのに頷いて、
我慢出来そうにないのに首振って、
遠慮がちに笑って見せる仕草を
私はもう何度繰り返してきたのか。

素直になれない私は嫌い。
でも、素直にならないだけなのも
分かっているから、ずるいの。

気付いて叱ってくれたなら。

私はあなただけに開きたい。
詰まっている悔しさも辛さも、
あなたの前でだけ、素直に泣きたい。

私はあなたが好きなのよ。
もう、どうしようもないほどに。

だから、あなたに期待かけて、
願いかけて、伝わってほしいのと、
目で精一杯に伝えるの。

気付いてほしいのは、
態度の裏にある、私のどうしようもない愛情。

甘えを、あなたに許されたくて、
でも、許されるのが怖くて、
気付いてほしい、
だけどやっぱり、気付かないでいい。

私はもう、あなたのことで頭がいっぱい。

溶けない心

幻想は覚めても、上の空の現実。
どうしてこうも色味が失せて、
私の頭上に浮かんでいるのか。

何にも見えないのは、
何も見ないから。

この目が霞んでいるのは、
焦点を無くしたから。

本当は気付いていた。
だけど幻想を見ることでごまかしていたんだ。
夢に終わりがあるのは当然と、
私は分かっていたはずだ。

現実に意識が帰ってきて知る。
無情はこの空を流れているのだと。
ただ、当たり前に流れているのだと。
平然を装って、私を飲み込んでしまう。

地を走る私は、それに気付いてたはずだ。
なのに、見なかった、それだけのこと。

忘れ去った情熱は、
もはや幻想が何処にあったのかさえも
定かではなくしてしまった。

だから、幻想があったこと自体、
私はいつか忘れて生きていくのだ。

流れる無情に身を任せて。

夢を見ていた。
見ることが出来ていたんだ。、

その事実だけが私の幸福。

理想から離れて消えていく。
私はありうる現実にのみ、
分量を違えない期待を抱く。

無情の雲を、目で追いながら、
私は変わらず、地を馳せていくのだ。

とてもとても冷静で、
無駄がなく整頓された、
小綺麗な風景。

思い馳せることは、目に見えた明日だけだ。

気味の悪い会話

思考のない言葉が私に向かって来る。
拒絶という矢は、「ぐやり」と温く刺さる。

思考のない言葉が私に突き立ち。
心なく私は「ぬやり」と抜き去る。

どうにも奇妙な感覚が浮遊する。
だけど、どこにも、裏もなければ心もない。

事実に対し、ただ「感情」が張り付く。

その事象には過去も現在も、
描かれるべく未来の影すら映りはしない。

あなたはただ、温んでいる。
私は、白々とその目を見つめている。

交差する言葉ですら「ぐやり」として、
中点は「ぬやり」と何かを通している。

ただ、感情だけが、そこには張り付いていた。

到達点

惨めなものだ、と思う。

僕が百歩歩くところを、
彼女が五十歩で到達してしまう。

それは仕方がないことだ。
生まれながらに彼女と僕の条件は違う。

彼女が僕に何故、と問い掛けるとき、
僕もまた問い掛ける。
何故、分かってくれないのだ、と。

それは仕方がないことだ、
それで済ます僕を、
向上心のない人と彼女は呼ぶ。

仕方がないことは覆せない、
僕の理論を彼女は少しも飲み込まない。

僕は亀に生まれてしまったが、
彼女は兎に生まれてしまったのだ。

僕からすれば彼女が羨ましくて堪らない。
彼女はそれを嫌だという。

仕方ないじゃないか、何もかも違う。
何が同じでも、何もかも違うのだ。
彼女はその違いに泣く。

僕だって、泣きたいんだ。

彼女が五十回、僕のことを好きといえば、
彼女は満足して僕を置いておける。

だけど僕は百回言い続けなければ
彼女を置いておけるような安心はない。

僕は百回好きと言って、と願う。
彼女はどうして、と問う。
それじゃ足りない、という僕の
その意味が分からない。

僕からすれば、五十回で
満足出来る彼女が分からないのに。

同じところに誰もがたどり着ける。
そんな条件は同じでも、
かける時間、かける努力の量は
各々違うものだから。

僕は百日かけて彼女を想う。
だけど彼女は五十日で満たされる。

足の遅い僕は先を行く彼女の背を見て、
何度も何度も願うんだ。

振り返ってくれ。
そして、立ち止まって、待ってくれ。

必ずたどり着くこと、
それを信じていてくれ、と。

君は僕のそんな想いに気付いている？

君のところにたどり着いた時、
「ありがとう」とかける言葉の意味を
君は知っているだろうか。

君のその不思議そうな丸い目、
そこがいつでも僕の到達点。

Irony

寂しさを忘れても

人は息を続けられる。

焦がれれば焦がれるほどに

切なくて、愛おしいのに

私は簡単にあなたを忘れられる。

日が経つほどに

想いは重ねていくのに

その分だけ離れていく。

私はあなたを忘れられる。

もしも誰かが本気で忘れろと声を上げれば、

私は少しずつ、終わりに向かえる。

もしもそんなことがなくても、

私はやっぱり、大事に出来ない。

思い入れれば、思い入れるほどに、

あなたはあなたとしての

価値を終えてしまうの。

最後は笑おうと決めているのに

いつだって私は涙が先に出る。

どんな言葉を貰っても、

「ごめんなさい」

その言葉でしか返せないの。

ごめんなさい、愛していました。

だからこそ、さようなら。

意味も理由もここにはあるのだとしても

私はそれを示す言葉が見つからないから。

理解できない、

そんなあなたの声にいつも、

ごめんなさい。

私はそれで終わらせてしまうけれど。

本当に愛していました。

本当に大事でした。

だからこそ、さようなら。

誰かと一緒に居たいのに。

誰かを愛していたいのに。

私は独りを手離せないよ。

ごめんなさい。

さようなら。

理由のない

あなたが望んだ先から千切れていく。
私はそれを笑っている。
あなたが走る先から躓いてしまう。
私はそれを笑っている。

愉快のかけらもない、
悲しくて笑っている。

哀れ。

あなたのそんな姿を見せられる度に
私があなたを好いていること、
なんて皮肉なことなのかしらね。

あなたは私を憎むでしょう。
あなたは私を羨むでしょう。

嫌味たらしくそばにいる、
私が疎ましいんでしょう。

そんな目が悲しいくらい愛おしい。

狂気を侍らせた私の体内を
あなたは掻き乱してよ。

あなたが起き上がって、
また、何かに触れては弾かれるのを
私はずっと待っているの。

こんな愛し方、堪らないわ。

私はあなたを笑っているの。
あなたが何かを起こすことを
急かして怒っているの。

ねえ、早くして。早くして。

早くして、でないと。

私はもう、どうしようもないほど、あなたが

絶てない光

あなたと重ねた色も、

いま彼と重ねる色も、

どちらも、大事よ。

私は忘れない。

忘れてないよ。

あなたの前で彼と肩を触れさせ、笑うの。

隣の彼は、何も知らない。

彼と目指す景色には

きっとあなたの影は宿らないけれど、

私は忘れない。

心に根付いた小さな棘を

私はいつまでも、

抜き去れはしないの。

あなたと重ねた色も、

いま彼と重ねる色も、

どちらも、大事よ。

私は忘れない。

忘れてないよ。

落ちてく陽の光りの中から、

私は私の影を見る。

そこに映る私には、

幾重の色が重なって、

黒で塗り潰してしまった、

私が映るんだ。

残る影に、あなたは。

その隣で先を指す彼の瞳の発光に

私はただ、目を奪われて、

ただ、息をする。

本当の裏側

中身のない叫びは
ただ光りへと消えていく。

あなたは笑わない。

歪ませた表情に残る嫌悪を
私は静かに思っているの。

私はあなたを信じない。

行き場のない感情は
紙面を撫でて、燃えていく。

あなたの歪んだ表情を
私は、ここで知るだけ。

痛みが生きる。
幸福は笑わないから、
私は弱る体を溶かすの。

消えてなくなりはしないものは、
凍てついた心を溶かしても、
そのまま、跡を残してしまう。

どこへも行けないものは、
紙面を撫でて、燃えていく。

灰を吸うのは私。

生きるのは嫌悪。

あなたは笑わない。

柔らかな風に吹かれても、

私は絶対に、あなたを信じられない。

波状の庭

あなたの声が耳を打つ波

その時のあたしは、生きて、

ここで、静かな、静かな、

思想に触れるのです。

流れていく音の波

あなたからあたしに届く、

螺旋の電波

これが煩わしいのです。

あなたは私に、

居場所を示すわ

あたしはそれを望むの

こんな交差が、二人を離すの。

あなたと笑い合いたいのに、

その機会はどこに落ちているの。

いまじゃない、

私は何時まで待てばいい。

寄り合う術のない日常

あたしは、螺旋を描く電波を

なぞるのを止めた。

あなたの声の波は止んで、

静かだ。

独りなの、あたしは。

孤独感を埋め合おうなんて、

絶対に行き着かない。

あなたは淋しいのかしら。

あたしの声が止んだ日々を

どう思うのかな。

寄り合って満たし合えていたなら、

それがなくなった日常は

ただ静寂を生むのだとしたら、

あなたはどう受け止めるのだろう。

あたしの孤独は静かな涙一筋に変わる。

だけど、見付からない。

あなたと笑い合う機会の一点も、

ここには生まれない。

声の波が止んだいまには、

ただ、孤独しか生まれないのに。

埋め合うことのない二人。

誓いを

衝動的に君を抱きしめたら
君はくすぐったげに笑ったから
僕はそんな君を抱きしめて
離せなくなった。

ずっとこのまま、
離さないでいたいね、なんて。

どこまでも甘い台詞はいつも、
切ない感情を潜んでいるから。
それすら包み込んで君は笑う。
安心すると、忘れられなくなる。

君ごと僕になれば。

笑っていってみたけど、
胸はきりきりと切ない。

僕の何も知らないで、
何を知っても、
君は君のままでいて。

愛しくて、苦しくて、繋いだのに。
今度は離せなくて、止まらなくて、
辛くて、悲しいんだ。

夢に溶けていきそうな空間は
僕らだけ置いていく。
時間の中に二人の思いだけ残して。

これ以上の想いを伝えるだけの
言葉も、行為も、知らなくて。
ただ衝動は僕を突き動かして

君を飲み込んでいく。

愛しいのに、
君はいつも切なげな表情をする。

君が、僕と同じものを恐れるなら、
大丈夫と言える。

同じ不安、同じ痛みを抱えても、
同じ未来は歩めないなんて、
いつか泣き出す日が来るなら。

いまを過去に変えて、
全てを忘れたい時が来るなら。

僕はそれでも、誓うよ。

ずっと君を背負って生きていく、と。

人工物

私の体に設けられた、
狭く脆い穴は何を受け入れる為に。

感情すら入り込めない、
ただ物質的な。
それは私を生物化させ。

「もの」になって私を欲して。
ただひたすらに「ひと」は要らない。
イタイもの。

私、「ひと」のままで、「もの」になれない。

拒んでは望んで、
熱は芯から体を突き上げる。
汗のままに忘れて。

私についた「鍵」を壊して。

「もの」になって私を欲して。
ただひたすらに「ひと」は要らない。
イタイもの。

他の何も受け入れられない。
これが本当になったなら、
私、もう、「もの」に帰れない。

病床

風邪を引きました。

それは君がいなくなってしまってからのこと。
僕はベッドで一人きり、日中ずっと眠っているんだ。
君はどこかであくせく働いていることでしょう。滑稽だね。

熱が出て。汗をかく。

こんなときに見る夢は歪んだ道を歩く、暗い雨の中にいて、
いつも何かを失くして、いつも何かに泣いてしまう。
何も変わりないのにね。
君ひとりがいなくなっただけで、こんなにも僕の世界は色あせてしまうのかな。

喉が枯れて、咳が止まらず。

これといって僕に変化はない。急に襲う不安も、哀しみも、苦しさも、
全部、薬を飲めば止んでしまう症状だから。
おかしいね。「僕にとっての君はその程度だった」そう思ってしまうことが怖いよ。

目が眩んで、瞼が重たくて、もう、起きていたくなくて。
こんな無気力は、風邪のせい。
こんなにつまらないのは、思考が安定しないせい。
こんなに頭が痛いのは、考えすぎかな。

みんなが言うんだ。
僕の恋愛は「とてもみじめだ」って。

どんなに辛くても、どんなに寂しくても、何が嘘でも、全部が夢でも、
僕は幸せだよ、いまでも。君を思うだけで、幸せ。

だけどおかしいね。

どんなに君との未来を描いても、どうにも掴めそうになくて、
熱で浮かされた体は、起き上がろうとしない。

もう、君に向かって走れない。
もう、君に向かって走れない。

でも、前に進んでいくことすら、億劫なんだよ。

そう、こんなことは薬を飲めば止んでしまう症状だから。

ねえ、教えて。

もしもこれが熱が見せる夢なんだったとしたら、
どこから夢だったの？

薬を飲んで、熱が下がって、瞼が軽くなって、思考が安定したら。

僕は君自身と出会えるのかな。

この悲しい夢が終わった時、僕は君に出会えたら、何を想うのかな。

苦い、苦い、薬の味が広がる。

壁

無情で出来た壁は
理論のペンキで色付いている。

「つまらない」

私は、見上げている。
壊れない壁を見上げている。

その壁には梯子が掛かっていた。

上では人の声がする。

見上げながら、
「つまらない」と私は口にする。

どれが正しく、
どれが楽しいのか、なんて。
分かりそうになかったんだ。

不似合いな私は何故、ここにいる。
何故、私は彼等に梯子を用意されたのか。
どうしてそれに、応じようとしているのか。

無情の壁に足を掛けて
理論のペンキに足跡を付けていくけれど、
これは多くの矛盾を孕んでいる。
これは多くの裏切りを示している。

ときどき、自分に失意を覚える。

引き上げられ、
私は「私」という概念を押し付けられ、
着込んでいるんだ。

溶け合うには。
私が「私」に変わるには。

なんて無情な壁なんだろう。
「つまらない」
と私は泣くのに、
それでも自分に嘘をつく。

私の言葉は死んでいた。

微睡

http://p.booklog.jp/book/110517

著者：翠
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/acroite/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/110517

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/110517

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ